

福音から生ずる喜び

今日から、いよいよフィリピの信徒への手紙の本文に入ってゆきます。今回は冒頭のあいさつ部分を取り上げました。パウロは、フィリピの信徒たちと地理的に離れており、というよりこの時、彼は福音伝道の結果、投獄されて自由がありませんでした。当時は電話などの通信手段があるような時代ではありませんでしたから、会えないことから生じたかもしれない心の距離を「キリスト・イエスに結ばれている」という聖霊の現実を指摘することで一気に縮めています。ここはとても大切なところで、彼らを結び付けているのは同じ神を戴き、「福音に与っている」という恵みの出来事によるのです。ギリシア世界は多神教の世界ですから、みな自分の好きな偶像を拝んでいます。フィリピに住む多くの人々は、それぞれが勝手に自分の願望で神を作り出している。それは世の常ですが、信徒たちはそうではない。すべてを創造し、歴史を支配され、キリスト・イエスを贈られて世を贖われたまことの神をとともに戴くゆえに、彼らはぶれることがないのです。同じ方向を向いている。そこから同じ思いを抱くことが、福音に聴き従うことによって可能とされているのです。この手紙は、わたしたちを一つの民とする神の霊の働きに信頼し、そこに軸足をおいて書かれているのです。

もうひとつ今日の個所を読んでいて気付かされることがあります。それはこの手紙の持っている明るいトーンです。ここは「フィリピの信徒のための祈り」と表題がついていますが、感謝の祈りが内容です。パウロが、フィリピの信徒たちのことで神に感謝をささげ、喜んでいる、そういう個所です。まあ最初からアクセル全開で高速道路を走っているような、パウロの、福音を分かち合う関係に置かれていることから生じる喜びに圧

倒される思いがいたします。彼は「わたしたちの神に感謝し」、「喜んで」います。この感謝と喜びは、この手紙の通奏低音としてずっと手紙の終わりまで響き続けます。こういう手紙が書けた理由の一つは、お互いが良い関係を保ち続けていた。ちょっと俗な言い方をすると、相思相愛の関係が続いていたことにあります。パウロはこの祈りの部分で、フィリピの信徒たちのことを、いつも神さまの御前に覚えて感謝していますと伝えています。この彼の喜びは、この手紙の後半で語られるフィリピの信徒たちからの経済的な援助、一贈り物という言葉で表現されています—、またそれだけではなく獄中にあるパウロを気遣って、彼らは自分たちの群れの中からエパフロディトという人物を送ってまでパウロを支えようとしたことが2章から分かります。実際、フィリピの人たちはずっとパウロのことを心配して、その将来のことを考えていました。パウロが喜んでるのはそうした物心両面の具体的な支えもありますが、なによりもそのように気遣い、行動にあらわすフィリピの信徒たちの志(こころざし)、これを起こさせる神の導きであり、そのように彼らが行動できるということが神の福音に与っている何よりの証しだからでした。このあたり、わたしたちが篠田名誉牧師に寄せていた気持ちを考えてもらおうと近いかもしれません。「シルバーホームまきば」に先生が行かれた後も、わたしたちはキリスト・イエスにむすばれて一つだったと申しあげても良いのではないのでしょうか。こうした「最初の日から今日まで」にいたるフィリピの信徒たちと伝道者パウロの交流がベースにあって、その積み重ねの上にこの手紙が書かれている。ローマの信徒への手紙のように、まだ自分が行ったことのない教会に書いた手紙ではありません。またガラテヤの信徒への手紙のように、福音信仰から外れてしまった人々を正しい教えに引き戻すために叱り、

なだめ、懇願する手紙でもありません。お互い気心が知れ、良い関係の中にあるからこそ、喜びの手紙足り得ている。そして、その良い関係とは、彼らが福音宣教のために共に労苦を分かち合っていることによるのです。ともにキリスト・イエスに結び付けられて働き、支えあい、祈りあう者たちだから、言うならば戦友のような連帯感で結ばれている。パウロは彼らのことを思い起こすたびに感謝の念が堪えない。そして、このように善い業をもって福音伝道のために労苦を分かち合っている彼らに対して、神に感謝をささげずにはおれないのです。それは、このような良い業を始めて下さった神が、必ず彼らを「キリスト・イエスの日まで」に、その善い業を実現させてくださると固く信じる事が出来るからです。この感謝以外にはないというのは、パウロの実際の境遇を考えますと、本当に凄いことですね。この手紙は獄中で書かれました。パウロはいま拘禁され、裁判を待つ身です。そして、実際はこの後、パウロは長くは生きられない。終わりが見えているのです。しかし、この手紙は「喜びの手紙」なのです。だれもパウロからその喜びを奪うことは出来ない。パウロは苦難や逆境のなかにあっても喜ぶすべを心得ている。それは福音に与っているというただ一つのことによるのです。福音とは、キリスト・イエスにおいて神がわたしの味方となっていて下さり、わたしの罪の問題も、やがて必ず迎える死の問題も解決されていて恐れる必要がないということです。十字架と復活の主が、罪と死の支配を打ち破られた結果、全ての問題が解決され、善いものに変えられているので感謝であるし、平安なのです。こういう福音から生まれる平安や静かな喜びは、いま新型コロナウイルス感染症対策下にあって、さまざまな制約を生きているわたしたちも学びたいところです。

パウロの喜びの秘密は、自分の生まれつきの感情や、変化す

る外部の環境に任せず、ただ神に顔を向けていること、十字架と復活の主イエスの福音に立っていることから来ています。ちょうど朝顔が芽を出して、双葉が出て、それから弦を伸ばして柱に巻き付いて成長してゆくように、パウロの思いは自分のうちに拠り所を求めるのではなく、神に巻き付いて成長するのです。すべてのことを神により頼んで生きる姿勢を身に着けていることがパウロの秘密と言ってよい。獄中であってさえ、この喜びを消すことも、取り去ることも出来ない。この個所に取り組んでいまして、わたしはふと、去年のアドベント第二週に、洗礼者ヨハネが獄中から主イエスに「来るべき方はあなたでしょうか。それともほかのだれかを待たねばなりませんか」と尋ねた個所で説教したことを思い起こしました。同じ獄中で過ごしながら、先駆者である洗礼者ヨハネは不安であり、一方のパウロは平安で喜びに溢れている。互いに生涯の終わりを予感しているこの時期に、二人の態度ははっきり違います。この違いこそ、「預言者と律法が預言したのは、ヨハネの時まで」と主イエスが表現なさった境界線ですね。まさしくキリスト以前とキリスト以後という、人間ヨハネにはいかんともし難い境界線がある。これが分かれ道なのです。「神我らと共にいます」ということがイエスさまの御生涯において真実となった。わたしがどのような人間であっても、この神の恵みの真実は取り去られることがない。キリスト・イエスはわたしたちを愛し、赦し、ご自分に結び付けて下さった。だから、パウロは出発点を自分自身から、神の恵みそのものであるキリスト・イエスに移しているのです。神さまが、イエスさまによって、わたしのために何をして下さったか、わたしのために死んでくださり、よみがえられたことによって、罪がぬぐわれ、神に対して一切の負債を負うことのない者として下さった。この恵みの事実を出発点と

したのです。神さまの、わたしたちに対する判決はキリスト・イエスによって肩代わりされ、恵みに変えられた。罪は担われ、死は終わりではなく眠りに変えられている。復活とは罪と死に対する勝利に他ならない。この福音の告げる希望以外を自分の上におかず、主の言葉と約束に聴き従って人格と人生と共同体を作ることに専念しました。こうしてパウロは地中海の各地にフィリピの信徒たちのような群れを形作っていったのです。今彼は獄中にいますが、みずからの生涯を振り返って、教会の信徒たちとの交わりを思い起こして感謝の念しかない。ああ、有り難い、自分のしてきたことは無駄ではなかったと人生を振り返って思うことが出来るほどに幸いなことはあるでしょうか。それはすべて神の福音というキリスト・イエスの出来事を中心に据えているからです。パウロは自分のために生きたのではない。福音に、キリスト・イエスの出来事に関わって生きた。ほかのことはすべてキリスト・イエスと共に生きるということから整理されてゆきました。ここから逸れなかった、福音に与り続けたということがパウロを逆境にあっても守っているのです。

洗礼者ヨハネの苦難は、このキリスト・イエスの十字架と復活を知らずに役割を終えていくことでした。神の恵みによって救われるという主イエスの御業を直接体験することはなかったのです。そこに先駆者ならではの苦悩がありました。だから洗礼者ヨハネは不安になったのです。しかしパウロは違う。キリスト・イエスがわたしのために生きて下さり、その命を十字架に置いて下さった。そこに主に愛があることを知らされた。罪も死も、このキリストから、わたしたちを切り離すことは出来ない。この神の恵みへの確信が感謝の根拠でした。パウロは自分の事も、フィリピの信徒たちのことも、主の恵みに委ねています。自分で負いきれない重荷を背負って堂々巡りをしません。

自分はキリスト・イエスに結ばれており、彼らもそうなのですから、自分たちの命を主の御言葉に委ねる。そうすれば、問題は神さまの御手のうちに置かれ、主が共に担って下さる重荷に変わります。だから、パウロは喜ぶことが出来ましたし、自分の歩みが少しも無駄にならないことを確信して喜んだのです。教会の中心には、福音があり、わたしたちは恵みによって生かされる。この手紙を通して、福音に与って生きる喜びと平安を、わたしたちも共にしたく願っています。

お祈りいたします。